伊太利ところ〴〵（五）

瀧川規一

〔ミラノ〕　ミラノは人口六十六萬餘を算する伊國北部の大都會である。四方繞らすに沃野をもつてし市を圍むに城壁の一部をもつてしてゐる。商工業殷盛を極め恰も吾が大阪若くは名古屋の觀がある。工業都市として吾人に直接の關係を知つたのは人造絹布の染色法の技師がこの地から聘されて某會社に居つた頃數回面談しミラノの話を聞いた時である。ミラノの市民は邦人來遊客を歡迎し、ミラノ娘は美しくて柔かく邦人の娘に似た處があるなどと聞かされ且つは若き技師の優雅なる擧措態度に魅せられた時未だ見ざる都市に一種の憬を覺えたのである。

それより數年後の眞夏に滴る汗を拭きつゝこの都會に照りつく陽光を樹陰に避ける日が來た到着の日の午后町の樣子を見物に出かけると見知らぬ一紳士に透はれて目星しい場所をここかしこ案内された。見知らぬ人の親切にほだされて扈從したものの內心常に憂を抱いてゐる。二人がカステロ（Castello Sforzesco）前のレストラントへ行つて一杯のコーヒを求めると拒はれた。紳士は『こゝの給仕女は田舍娘で言語不明晳だ』と云ひ、差向ひのコーヒ店の店頭に席を移す。今まで經過した鐵道沿線に見える伊太利の山湖の風景に就いて自慢話がはじまる。ミラノの歷史から地理に至るまで詳細な說明を聞かされ自己紹介が始まる。件の男は『機械學で學位をもつて居り獨身で下宿をしてゐるが、專門の職業上日本へも行つたことがある。オフイスから歸つて來た途中であり夕方までは暇があるから案内してやる。ミラノは巴里の延長のやう

な處である。オフイスに勤務の娘等の仕草を見せてやる。それを見れば成程と思ふだらう』などと要領得たやうな要領を得ぬやうなことを云ふ。夕方まで件の紳士に案内されて價値ある處あらぬ處まで悉く見物した。眞夏のこととて汗は背に通る。瑞西の氣候が餘りよく洗濯物をためてゐたので、着換への肌着一切を買はねばならなくなつた。とある店に入つて靴下、シャツカラ、サルマタ、ネクタイ、ハンカチ等を揃える。安價物でよいと注文したに拘らず高價品しかないとて安物を見せて呉れない。さて見る品物はどれもこれも大阪製である。ミラノで大阪品を一切揃えて買ひ込んだ時故國の爲めに氣焰を擧げた。商主の謂ふ處に依れば『關税さへなければ日本品は、安價で品質がよい。只税金の爲に高價になるので困る』と云ふのである。

羅馬の聖ペテロ寺院、西班牙のゼヴイユの伽藍と並稱せられ歐洲の三大伽藍と呼ばれてゐるミラノのヅオモ（Duomo）に訪でる。成程世間で噂が高い程あつて外觀は堂々たるものである奥行五百呎間口二八八呎、尖塔の最高點までの高さは三六〇呎だと教へられる。内部に入ると名詮自稱のガラン堂である。シンガポールで回教の殿堂がガラン堂であつた。神様はどこに鎮坐ましますかと問ふたことがある。今またミラノでも神様の所在が判らないと感じた。尖塔の上に登る。沃野千里の眺望は恰も大阪城から攝河泉の平野を眺めると等しき感がする。雪を戴くアルプス連山は半圓を描いて近く北に連りアペナインの山脈は遠く遙に水平線の半を作つてゐる。尖塔塔上に恰も上り合はせたものは僅三人である。嘗つて巴里のノートルダムの塔上で降下の時刻を忘れた若夫婦らしき者が番人の婆さんにしこたま嫌味を云はれ、追ひ降らされて居たことを目擊したことがあつた。今また殘りの二人が番人に叱られる。地下室に案内されて有名な王冠を戴いてゐる骸骨の像を見る。肩に自分の皮膚の剝いだものをひつかけてゐる。一見よい感じがしない。聖バルトロミュの像である。舊教國に入ると聖人の數が多い。聖人の戸

籍調が必要になる。この聖人は生きながら皮を剝がれて十字架にかけられたと云ふ傳說をもつ十二使徒の一人である。隣の建物にある聖像室(Cappella San Carlo Borromeo)には日本人だと云つて特別扱ひをして拜觀を許して呉れる。他を排して請じられる樣子を他の訪客が啞然として見てゐる。歐洲の天地で斯くの如く巾の利いたのは前後これが只一回である。また聖人の戶籍調が必要である。この聖人は十六世紀の人物であり叔父にピウス四世(Pius IV)と云ふ法王をもちミラノの伽藍の僧正であつた人である。敎會の淨化運動に盡力し敎育事業に盡粹し慈善事業等に私財を悉く投げ入れ遂に十七世紀になつて聖人の列に加へられたのである。

グランド・ホテルで中食してゐると向ひの卓に居つた英米人間に吾輩の國籍論がはじまる。ホテルのボイは日本人だと云つて打ち消す。日本人たることが定說になると待遇が一變する。ボイを捕へて飛行機の話が始まる。十五世紀の昔に飛行術を發見せんと專念したレオナルド・ダ・ヴインチ(Leonardo da Vinci)の話から轉じて『日本でも飛行機が製造されるか』と忌憚なき質問を向けられる。ミラノにある飛行機工場見物の手續を依賴し國籍論議をなした連中と繪畫論をはじめる。サンタ・マリア・デレ・グラチユ(Santa Maria delle Grazie)にある例の有名なレオナルド・ダ・ヴインチの『最後の晚餐』(il cenacolo)の壁畫に談論が自ら推移する。記者は未だ見てゐないので彼等の議論に傾聽する丈けである。

甲『壁畫は今日幾分磨滅して消えて色彩が淡くなつて居る。それで觀者の印象は想像によつて補はれてゐる。そこに雅味を覺えるのである。

乙『一人一人の姿勢と顏面とを熟視すると十二人の聖徒は必ずしも異つたモデルを使用したのではあるまいと思はれる廉がある。基督自身もよく出來てゐるが、使徒の方が一層よく出來て居る。

甲『とにかく全體の纏りが申分ないと思ふ。

乙『食卓の一方には誰も坐つてゐないのは不自然である。

甲『背後を書くことは自然であるかも知れないが、畫家は使徒の表情を主眼として或る程度まで左右均齊を考へたのである。文字通に卓を圍むことはあの場合許されない。

乙『現代の壁畫たとへばワシントン府にあるが如きは名畫ではあるが、新らしい丈けそれ丈け物足りない。

甲『世界の名畫に匹適するものを見出せないことは當初から承知してゐるが、とに角愚論を云つて見なければ名畫の印象が殘らない。他人が感心するから只ぼんやり感心する丈けでは物足りない。繪に素人であるものが勝手な熱を吐いて印象を深くするのも一方法である

乙『その點は贊成するが、定説のある名畫を批評するのは聞き辛い。

甲『では名畫の前に立つて緘口せよと仰つしやるのですか。

乙『緘口せよとは云はぬ。誰でもよろしいから尤らしい説明を聞きたい。

甲『それは自分も最初から願つてゐるのであるが同行の誰も尤らしき説明をして呉れない。こんなことを喋つてゐると夕方になる。打連れてスカラ座（Teatro alla Scala）にダンスを見物する。ダンス見物には緘口令を布かれぬかなどと談笑しながら出かける。眞夏の夜のダンスは踊り子も汗を滴らしてゐる。見物人も汗を垂らしてゐる。愈問題の『最後の晩餐』を見る時が來た。成程剝げて色彩が淡くなつてゐるが故國にあつて法隆寺の壁畫を見た時の感じと似通ふた偉大性を感じさされる。敬虔と優閑な心地とが融合した時斯かる名作が出來るのではないかと思はれる。只見物人が多くて佇立觀賞を恣にせしめないのは遺憾であつた。

バラッツオ・デ・ブレラ（Palazzo di Brera）にある。繪畫展覽場（Pinacoteca di Brera）にてこれまた世に喧しいラフアエロ（Raphaelo）の『マリアの結婚』（Sposalizio）を見るのが順序である。指輪を指さんとするジョセフの指と、右手

の指を差出せるマリアの指とに僧の視線が落ち兩側の使徒中殊に右側の婦人連の顏が如何にもよく出來てゐる。伊國の都會で往來で屢見受けるやうな少娘の顏である。四人何れもあどけない顏をして或は指輪を眺め或はマリアの顏を凝視してゐる。抑も伊太利の各地にて見る可き聖母の顏が畫家によつて各異り如何にも少女らしいのから順次に三十五六歲とも覺しきまで年齡の差がある。丸ポチャの美から面長の美に至るまで形體を異にし理性に勝つたのやら純無垢のやら種々樣々である。餘りに肉づきよきは宗教味を減じ餘りに面瘠せるは人間界を離れ過ぎ色形共に批評の言を評さざるものを求むるは誰かの讃辭の如くドレスデンの聖母像（Sistine Madonna）である。ブレラの像は何と云はうとも、Prinripara の顏をしてゐる。同じくブレラの展覽場にあるベルナルヂオ・ルイニ（Bernardio Luini）の聖母の顏の方が處女で娘に近い。

吾々はミランを發足點にし繪畫行脚を試みなければならぬ。所謂文藝復興期の美術の研究に進み入らねばならぬ。希臘に發達した藝術を模倣した羅馬人が次第次第に形式に流れ行詰つた結果豐潤性を繪畫に案出したのだと云はゞそれまでであるが、藝術家の理想をマリアに求めんとする時肉體美と精神美との調和を聖母の顏と指とに求めなければならない。マリアの像が顏面ばかりでなく指先まで描かれてゐる時この兩者を對比してそのモデルを想到する。所謂職業婦人の指、女流體育家の指、など悉く落第である。ブレラの聖母の指、天使の指、使徒の指等丈けを集めて見るのも面白いと不圖思つたのはこのブレラの指輪を受ける聖母の指の畫である

新著紹介

○日本中世史の研究　文學博士　原勝郎著

昭和四年十一月同文館發行　定價七圓八十錢

恩師文學博士原勝郎先生から、我々は西洋近世史及史學研究法を敎はつた、先生の指導は、實に秋霜烈日の慨ある潑剌たるものであつて、一度び先生に怒鳴られると、終生忘るべからざる印象をうける、とても同じ敎室の中に立つて居れな